

フランス語の隠れたしくみ 2

人称代名詞と範疇化：呼ばないうちは性はない

人称代名詞はモノを直接させないか？

前回に引き続き人称代名詞の話続ける。今回は、フランス語の *il / elle* は「コトバをさす記号」であり先行詞を必要とするが、日本語の「彼 / 彼女」は直接に人をさす記号だという点が、フランス語と日本語の隠れたちがいだという話をした。フランス語の *il / elle* は「言語的コントロール」を受けるが、日本語の「彼 / 彼女」は「語用論的コントロール」を受けるので、「コトバをさす記号」ではないという趣旨であった。したがって日本語の「彼 / 彼女」には本来、「昨日、澤田さんという人に会いました。*彼は...」のように、「澤田さん」を先行詞とする照応的用法はないということになる。いささか弱気に、「本来」とただし書きを付けたのは、近年英語などの外国語の影響で、このような用法をおかしいとは感じなくなった人が増えているからである。

ではフランス語の *il / elle* は必ず先行詞を必要とし、いつでも「コトバをさす記号」として働くのだろうか。ある日のこと、猛スピードで坂を下る自動車を苦々しげに見て、かたわらのフランス人が *Ils roulent comme des fous!* 「あの連中ったら、とんでもない運転をするんだから！」と叫んだ。こういう事例に出くわすと、私たち性格のひねくれた言語学者は心のなかでニヤリとほくそ笑む。文法どおりの用例や、理論の予測どおりの事例はおもしろくも何ともない。そこからは何も出て来ないからである。文法に合わない用例、理論の予測を裏切る事例こそが大事なのだ。私たち言語学者は、自分が苦労して作り上げた理屈を崩してしまう事例を舌なめずりして歓迎するという変態的な人種なのである。だから、上のような事例がフランス人の口から出たとき、何も気にとめずに聞き流した人は、言語学者にはならないほうがいいかもしれない。

上の例に戻る。この例には破格な点がふたつある。ひとつは、車を運転しているのは一人なのだが（そりゃそうでしょう、二人で運転はできません）、代名詞 *ils* が複数になっていることである。これについては今回は触れない。もう少しあとの回でじっくりお話しする。もうひとつの破格な点が、今回の話題に関係する。見てのとおり、この *ils* には先行詞がなく、自動車を運転している人をさして、いきなり使われている。ただし、ドライバーを「指さす」という具体的な指示行為がなくてもかまわない点に注意しておいていただきたい。

性別とモノの範疇化 — コピー機の怪

ils が先行詞なしにいきなり使われているこの事例は、今回のはじめに述べたことと矛盾する。これをどう考えればよいだろうか。*il / elle* は「コトバをさす記号」で人を直接にさすことはないという前回の結論をドブに捨てるべきだろうか。いやいや

やそうではない．そうではないことを理解していただくために，ちょっと回り道をして il / elle が人ではなくモノをさすケースを見てみよう．

ある日のこと，ソルボンヌの図書館でコピーの順番待ちをしていたら，私の前でコピーしていた学生が振り向いて，Elle ne marche plus. と言った．この elle には先行詞がない．上のドライバーの例と同じである．しかし，だからといってモノを直接にさしているのではない．なぜならモノには性がないにもかかわらず，女性形の elle が使われているからである．elle を使っているからには，「女性の何か」をさしているはずだ．この「女性の何か」とは，上の状況では la photocopieuse 「コピー機」という女性名詞以外ではありえない．だからこの例のように il / elle が先行詞なしにいきなり使われている場合であっても，il / elle は外界のヒト・モノを直接にさしているのではなく，隠れた先行詞があるということになる．だから il / elle は，常に「コトバをさす」記号である．したがって前回の結論をドブに捨てる必要はない．

狐につままれたように感じる人がいるかもしれないので，もう少し詳しく説明しよう．便宜上，外界のモノ（上の例ではコピー機）を という記号で表わすことにする．elle がコピー機を直接にさしているとすると，その図式は次のように書けるだろう．矢印は「さす」という関係だとする．

elle

しかしこの図式はあり得ない．繰り返すが，モノには男性・女性という性の区別がないからである．フランス語ではこのように外界のモノを直接にさすときには，人称代名詞ではなく，性の区別のない指示代名詞 ça / ceci / cela を使う．elle を用いているからには，正しい図式は次のようであってはならない．

la photocopieuse elle

コピー機を elle でさすことができるのは，それがまず先に la photocopieuse と「呼ばれた」からである．小難しい用語が好きな言語学では，この「呼ぶ」という操作を「範疇化」（またはカテゴリー化）という．ここで大事なものは，「ひとつのモノは異なる範疇化を受けることができる」という点である．これが宇宙人の言葉のように聞こえる人のためにふつうの日本語に翻訳すると，「モノはいろいろな名で呼ぶことができる」ということだ．自分の自動車を ma voiture とも，ma bagnole 「ポンコツ車」とも，ma poubelle 「ゴミ箱」とも，mon bahut 「トランク」とも，mon tape-cul 「ケツ叩き」とも，mon tas de ferraille 「クズ鉄の山」とも呼べる（これはみんな自動車を意味する俗語的呼び名である．フランス語はののしり言葉にこと欠かない）．mon trésor 「私の宝物」，mon cauchemar 「私の悪夢」と呼んだっていい（ただしこう呼ぶときには条件があり，いつかお話する）．注意していただきたいのは，ma voiture / ma bagnole / ma poubelle は女性名詞だが，残りは全部男性名詞だという点である．自動車そのものには性別はない．当たり前の話だ．性別があったら怖い．自動車は ma voiture と呼ばれたら女性という性別を与えられ，mon tape-cul と呼ばれたら男性という性別を与えられるのである．つまりモノには性別がないが，それがあつた呼び名で呼ばれたときに初めて性の区別がつくということだ．モノは「範疇化」

され「言語化」されることで性という属性を獲得するのである。だから名詞に付属する男性・女性という区別は、物理的な外界に属するものではなく、コトバの世界に属するものである。私は日頃から、「コトの論理とコトバの論理を混同してはいけません」と口を酸っぱくして言っているが、それはこういうことをさしている。

ソルボンヌの故障してばかりいたコピー機の話に戻ると、私の前でコピーしていた学生が *Elle ne marche plus.* と言ったとき、この学生はコピー機を *la photocopieuse* として言語化し範疇化することを前提とし、*la photocopieuse* を先行詞としてコトバをさす記号である *elle* を用いたのである。

しかし、この先行詞 *la photocopieuse* は口に出されることはなかった。ならばそれはどこにあるのか。くだんの学生の頭のなかである。「えっ、それもアリなんですか？」という声が聞こえるようだが、「言語化」とは口に出すことではない。範疇化という認知的操作を行なうことである。だからこれは黙ったままでも頭のなかでできることなのだ。従って前回の結論をもう少ししていねいに書き換えると、次のようになる。

「フランス語の人称代名詞 *il / elle* はコトバをさす記号であり、言語的コントロールを受け、常に先行詞を必要とする。ただし、その先行詞は潜在的であってもよい」

コトバの世界ではヒトは特別

では最初のドライバーの例に戻る。この例の *ils* も同じように考えると、口に出されなかった先行詞があるということになるのだが、それは何だろうか。運転していたのはもちろん人間だから *homme* が先行詞で、次のような図式になるのだろうか。

homme ils

しかしこの図式は正しくない。その理由は、ヒトはモノと異なり、すでに範疇化が済んでいるからである。ここにヒトとモノの大きなちがいがあがる。コトバの世界では、ヒトは特別な地位を占めているのだ。その証拠に、次の疑問文 (1) は何の問題もないが、(2) は特別な状況や文脈の支えを必要とする。

(1) [目の前にある黒い塊をさして] *Qu'est-ce que c'est ?*

(2) [見知らぬ人に向かって] *Qu'êtes-vous ?*

que / qu'est-ce que による疑問文は、範疇化を求める疑問に使われる。(1) のようにモノをさすときこれは自然な疑問文である。しかし、(2) のようにヒトをさすときはおかしい。ふつうは *Qui êtes-vous ?* と名前を尋ねる疑問を発する。なぜなら相手がヒトであることは自明だからだ。日本語でも「あなたは何ですか？」という疑問文はふつうはおかしい。答えとして何を求められているかわからないからである。この疑問文は、昔懐かしい宇崎竜童率いるダウン・タウン・ブギウギ・バンドの「あんたあのコの何なのさ？」というような文脈でしか使えない。フランス語でも同じである。

(3) Qu'est-ce que vous êtes pour cette fille ? — Je suis son ami.

このようにコトバの世界でヒトが占めている特別の地位のせいで、il / elle はヒトをさす場合に限って、対象を直接にさすことができるのである。潜在的先行詞があると考えする必要はない。このために、次のように一見すると破格な代名詞の使い方が見られることがある。代名詞は目的格だが主語と同じように考えてよい。

(4) Le loup se jeta sur le Chaperon rouge et *la* mangea.

le Chaperon rouge 「赤ずきん」は文法的には男性名詞なのに、女性形の *la* で受けている。この *la* は le Chaperon rouge というコトバをさしているのではなく、コトバを飛び越えて、その名で呼ばれる女の子を直接にさしているのである。前号からの宿題だった Ils roulent comme des fous ! の謎がこれでおわかりいただけただろうか。

(とうごう・ゆうじ)